

# 松平家史料展示室 企画展 城下町福井と九十九橋

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 松平家史料展示室
- 会期 令和6年10月19日(土)  
～12月8日(日)

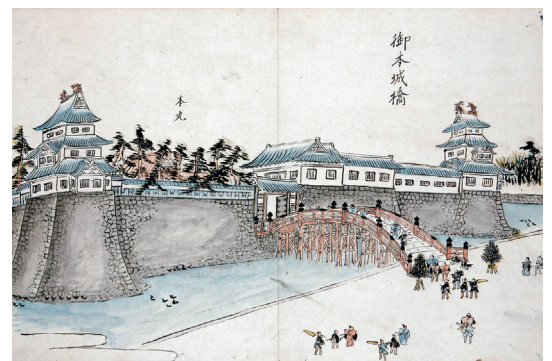
本展では、<sup>きたのしょう</sup>北庄から続く城下町福井の成り立ちや、城下を流れる足羽川に架けられていた半石半木の奇橋「<sup>つくも</sup>九十九橋」について、絵図や絵画資料、古文書や記録などの関連資料を展示して紹介します。

## 1 城下「北庄」から「福井」へ

戦国大名・朝倉氏の滅亡後、天正3年(1575)に織田信長は越前の「北庄」に築城を命じます。重臣・柴田勝家の居城「北庄城」です。勝家以降の北庄城主もこの城を越前支配の拠点にしましたが、慶長5年(1600)に越前国68万石を拝領した福井藩祖・結城秀康は、翌年から同11年まで北庄城を大改修し、城下町を整備しました。なお、寛永元年(1624)に「北庄」は「福居」(後の「福井」)と改称されています。その後、寛文9年(1669)の城下大火で福井城の大部分は焼失しましたが、天守を除いて復興されました。また、貞享3年(1686)の福井藩の領知半減(25万石)の際には、家臣の大規模なリストラがあり、城郭の南東部(城ノ橋)や南西部(毛矢)で武家屋敷が減少して、空き地が増えた時期もありました。

### テーマ展示1 「北庄」の城と町と有力商人

勝家の居城「北庄城」の本丸の場所は、現在の北の庄城址・柴田公園付近と推定されていますが、旧福井藩士・由利公正のように別の説を主張する人物もいました。藩祖・秀康は現在の福井城址に本丸を移し、「北庄城」(福井城)の大修築を行いました。上方の豊臣家や加賀の前田家との戦いに備えるために改修したと考えられます。織豊期の北庄城主の時代には、足羽川を挟んで「足羽三ヶ庄」と呼ばれた「北庄」「石場」「木田」の三つの町があり、秀康の時代には城下町に組み入れられていたようです。木田の橋屋、石場の金屋と慶松、北庄の駒屋などは城下の有力商人でした。寛文元年(1661)に福井藩は藩札を発行しますが、その信用元である札元に最初になったのは金屋と慶松であり、その後駒屋が札元となりました。



「福井城旧景」(御本城橋) 当館蔵

## 2 福井城下の奇橋「九十九橋」

九十九橋(大橋)は福井城下の南を流れる足羽川に架かっていた全長約160mの橋です。戦国大名・朝倉氏の時代や北庄城主・柴田勝家の時代にも架橋されていました。江戸時代の九十九橋は、南側が<sup>しゃくだに</sup>笏谷石の石造で北側が木造となっており、半石半木の奇橋として全国的にも有名で、当時の日本の橋の全国番付でも上位に載っています。橋の上を北陸道が通っており、南詰に小石原門、北詰には照手門と法令を掲げた高札場が設けられ、国内外への里程の起点にもなっていました。北側の橋のたもとには船着場があり、橋の北詰付近は陸上交通と水上交通の交わる要所として大いに賑わいました。



古写真「九十九橋」福井市春嶽公記念文庫

### テーマ展示2 九十九橋北詰の常夜灯

幕末頃の九十九橋を描いた絵のなかには、橋の北詰に常夜燈を描いたものがあります。実はこの常夜燈が造られたのは、明治5年(1872)のことで、江戸時代には存在しませんでした。常夜燈は基壇が石造(笏谷石製か)で、上に載せる常夜燈は鋳造(銅造)され、総高は10m87cm余もありました。同6年7月14日に、東京から福井を訪れていた元福井藩主・松平春嶽もこの常夜燈を観覧しています。

# 小論「北庄と福井の城郭と町の形成について」

当館学芸員 印牧信明

現在、北庄（福井）の城と城下町の研究（文献・考古）の主要な成果が網羅されているものに『福井市史』通史編（古代・中世、近世）<sup>(1)(2)</sup>があり、福井藩祖・結城秀康が北庄城を修築する以前、織豊期の北庄城下の推定復元図なども示されている。以下市史に掲載されている北庄城下の推定復元図（図1）や江戸期の福井城下の構成図（図2）などを参考にしながら、私見を交える形で北庄と福井（福居）の城郭と町の形成過程を中心に述べてみたい。

## 1 織豊期の北庄城と侍屋敷

天正3年（1575）9月に織田信長は「北庄」に入り、「城取御縄張」をして築城を命じた（『信長公記』）。信長の重臣・柴田勝家の居城「北庄城」であり、越前支配の中心となった。因みに、戦国期の「北庄」には、戦国大名・朝倉氏の傍流の朝倉土佐守家（北庄氏）が居館を構えていたが、これが「北庄城」のように「北庄」の町の東方に存在したかどうかはわからない。図1の推定復元図は、織豊期の北庄城下絵図が発見されていないため、同時期の古文書や記録、寛保3年（1743）頃に福井藩士・村田氏春が編纂した『越藩拾遺録』など江戸期の史書や地誌などを参考に、現代の発掘調査の成果も踏まえて作図されている。

図1に本丸（天守）の場所が示されているが、『越藩拾遺録』に、勝家の生害の地が、江戸期の福井城の鳩門（漆門、図2の①）の枡形の所（現在の北の庄城址・柴田公園付近）であり、そこが「古ノ天守ノ跡也」とあることを根拠にしている。また、図1に示された河川の流路についても、『越藩拾遺録』などの記述に従って推定しており、吉野川と足羽川が合流する地点（漆ヶ渚）の北西に本丸が造られたとし、図では本丸の北側に二ノ丸・三ノ丸があったと想定している。なお、勝家の北庄城が落城した後、豊臣方の城主として丹羽長秀・同長重、次いで堀秀政が入ったが、堀は天正13年に「当城天守之用候」の縄を領内（金津廻）の百姓中に命じており（「堀秀政書状」）、城の整備が継続して行われていたことが窺える。但し、発掘調査に基づく考古学の見地からは、城郭全体はおろか、本丸や天守の位置の推定も困難であるとされる。<sup>(3)</sup>

図1で侍屋敷（武家地）は、北は神明社（現在の神明神社）の境内地にまで及んでおり（「神明社縁起」）、発掘調査で吉野川東岸にも侍屋敷があったことが確認されているので、城郭の周囲に存在したようだ。また、北庄城は「惣構」の城であったとされ、同図では侍屋敷のみならず、城郭西部に存在した「北庄」の町（図1の①）を含む、城下町全体が堀や土塁、河川で取り囲まれていたことを想定しているが、その範囲・規模については検討の余地があると思われる。

以上の点を踏まえ、まず、本丸の場所については、福井藩士・井上翼章の編著であり、天明元年（1781）に成立した『越藩史略』に、「今の鳩門内及酒井氏の宅地を以て本城とし」とあることから、江戸期の鳩門内（図2の①）と家老の酒井屋敷（図2の②）を含む地域に、範囲を広げて想定する必要があると思われる。城郭の範囲は『越藩拾遺録』に「前ハ今ノ三ノ丸太鼓御門ノ層ノ石垣其時ノママナル由」として、江戸期の太鼓門（図2の③）付近の石垣に、以前は旧北庄城の石垣が残されていたとされ、北側の城郭の範囲を推定する上で参考となる。

さて、明治26年4月（1893）に旧福井藩士・由利公正が松平家家令・武田正規に宛てた書簡<sup>(4)</sup>には、「福井市往古石山に添ふて羽翠川を通し、河南山上に足羽社ありと云ふ、これ今の足羽社ならん、河南十八ヶ村足羽社領なりき、朝倉亡ひ柴田勝家城を北庄に築く、これ今の毛矢なり」とある。由利の言説は、勝家が北庄城を築いたのは、（かつて由利の居屋敷があった）「毛矢（毛屋）」（図1の②）であるとするが、これは首肯できない。但し、勝家時代の毛矢に侍屋敷や町屋などが存在し

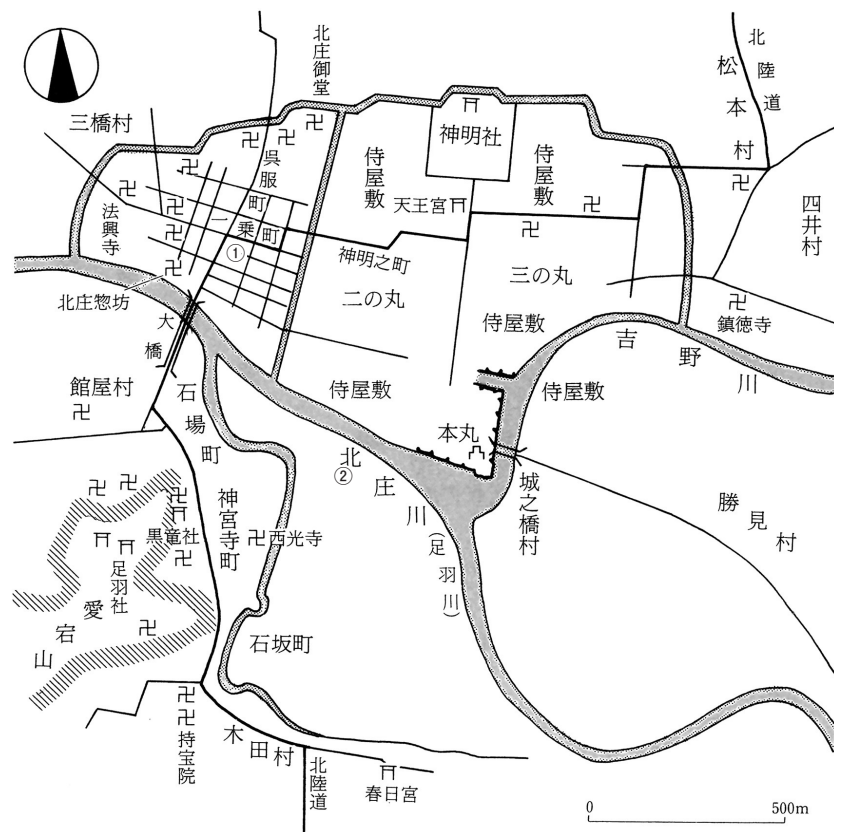


図1 北庄城下の推定復元図（『福井市史』通史編1 古代・中世より転載・加工）

ていた可能性はある。慶長後期の北庄城の絵図では、毛矢に武家地（図2の④）などが設けられ、足羽川に毛矢橋が架かっている。なお、後掲した図3は明治18年（1885）7月に福井市で発生した洪水被害状況を示しているが、市街地で浸水の被害を受けなかった場所のひとつに毛矢の対岸（図3の④）の微高地がある。江戸期に上級家臣の屋敷があったエリア（「大名町」）の南端（図2の⑤）に当たるが、この付近にも城郭があった可能性はあるだろう。

## 2 結城秀康の北庄城の大改修

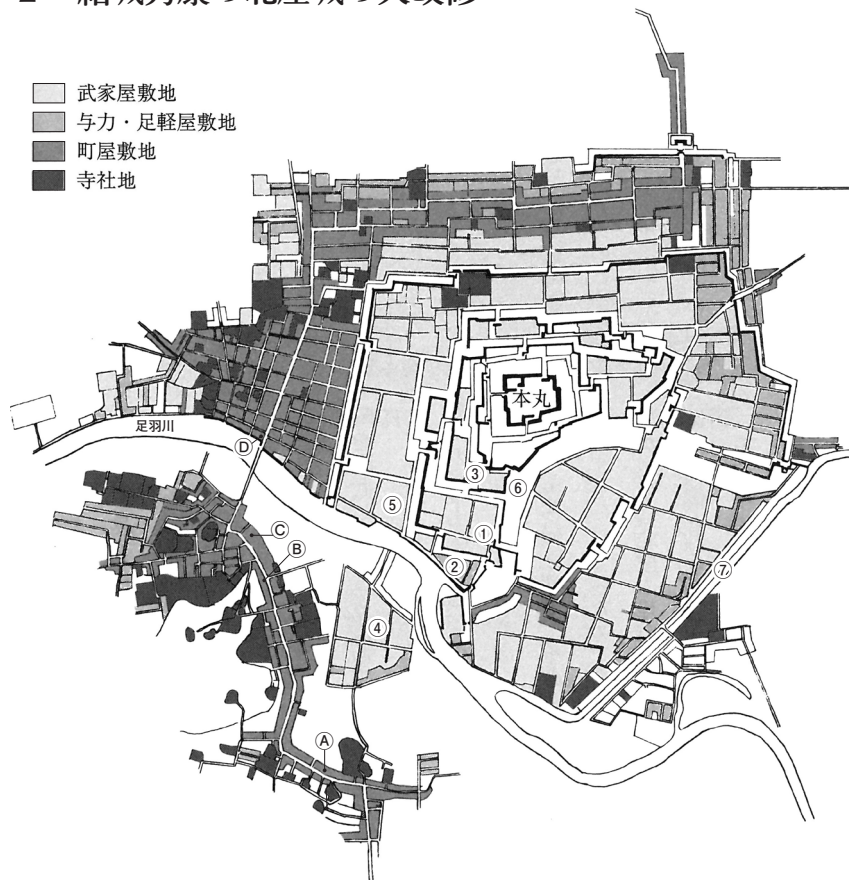


図2 福井城下の構成図（『福井市史』通史編2近世より転載・加工）

規模化するため、『越藩拾遺録』では「古へノ城ヲ改メ御本城ヲ北ノ高陽ノ地」に築城したとあり、本丸は図2のように北東の微高地に移動させて、周囲を2重3重の堀と石垣で防御すると共に、洪水の危険もある吉野川を氾濫原も含めて「百間堀」（図2の⑥）として利用し、城郭東部には土居（土塁）を伴った新川（荒川、図2の⑦）を新たに開削して、吉野川からの水流を足羽川に合流させることで、南・東部の防御を大幅に強化したのである。また、図1にみられる「北庄」の町との境にある西の堀や神明社の北側の堀なども外堀に改修されたと考えられる。図2のように巨大化した北庄城は原則的に本丸・二ノ丸を除く郭内に多数の武家屋敷を取り込み、郭外にも武家地が形成されていったのである。図2からも城下町で武家地の占める割合が最も大きいことがわかる。また、足羽山（愛宕山）周辺や足羽川以北の城下周縁部には寺社を配置したが、その中には秀康の越前移封に従って結城より引越しの寺社も含まれていた。

## 3 北庄（福井）の町の形成と有力商人

信長が越前支配の中心と定めた「北庄」であるが、北陸道と足羽川が交差するこの地域には、戦国期に「足羽三ヶ庄」と呼ばれる集落が存在した。図1にみえる足羽川以北の「北庄」と以南の「石場（町）」「木田（村）」である。北陸道に沿って町場化し、商工業の盛んな「市町」として発展したが、織豊期には足羽川に架かる九十九橋（大橋）を挟んで連続した都市的空間を形成していたと思われる。慶長6年（1601）に秀康が初入国した際に地子を免除したのは「城下市町」であり（『家譜』）、「石場」「木田」なども「北庄」の城下町（惣町）に組み入れられ、それぞれ町組を形成していったと考えられる。

ここで明治18年の福井市の洪水被害状況を示した図3に着目したい。被害は福井城址などを除き、足羽川以北と以南の市街地の広範囲に及ぶが、織豊期に市町があった「北庄」（図3の①）「石場」（図3の②）「木田」（図3の③）の場所は、浸水の被害を免れているようにみえる。足羽山東麓とそれに続く九十九橋北側の微高地に町が形成されたためであろう。

「石場」「木田」が北陸道に沿って線状に発達したのに対し、「北庄」（図1の①）は北へ延びる北陸道とそれに交差す

慶長5年（1600）、結城秀康は関ヶ原合戦後に天下の実権を掌握した父徳川家康から「肝要之地」である越前68万石を拝領した。当時の政治的・軍事的情勢から考えて、大坂を拠点とする豊臣家に対する軍事的な備えのためであり、同時に加賀藩・前田家に対する押さえの役割があったからに他ならない<sup>(5)</sup>。この点について「主図合結秘本」（『越前国名蹟考』）に、「加賀のつり合越前・越後なり、上方のおさへは越前、関東の押は越後なり、又越前のおさへは若狭なり」とあり、江戸期の越前国の地政学的な見地からも筆者の見解を裏付けることができる。

秀康の北庄城（福井城）は、南方から迫る上方方面からの軍勢や北方から迫る加賀方面からの軍勢に対峙することを想定し、同6年から足かけ6年かけて修築され、城郭の規模では加賀藩・前田家の居城・金沢城を凌いでいる。因みに、家康が本丸と二ノ丸の縄張りを行ったとする記述があるが（『家譜』ほか）、徳川方の重要な城の修築に父家康が関与した可能性はある<sup>(6)</sup>。城を大

る街路を基に町割がなされ、面状（格子状）に発展を遂げた。「北庄」は九十九橋の北側に形成された町であるが、勝家以降の城主は一乗谷など領内から商工業者の移住や寺社の移転を進め、天正6年頃には既存の町の北方に一乗町（図1）が形成され、同13年には同町の南に「一乗之魚屋町」（江戸期の魚町か）など一乗町組の町々が存在していた。図3の①の洪水を免れた場所はこれらの町域と重なっている。なお、一乗町の東の板橋を渡ると「神明之町」があり（図1）、その北側には「北庄」の産土神として崇敬された神明社があった（図1）。同13年に城主堀秀政は一乗町北方の柳町の土地を寄進して本行寺（表御堂・西別院）が建立され、秀康も慶長7年に同町の北方（後の常盤町）に、北庄惣坊と結城から引越した本瑞寺（裏御堂・東別院）を合わせて堂宇を建立させるなど、「北庄」の町は周縁部から開発され拡張していったのである。

※洪水のあった場所を  
黒色で示している。



図3 福井市街洪水略図（『福井市史』資料編10近現代一より転載・加工）

さて、戦国期の「足羽三ヶ庄」には「軽物」（絹製品）を商売する十人衆がおり、信長や勝家は、木田に居住する橘屋（図2の㉒）を「軽物座」（絹の座）と「唐人座」（薬種の座）の座長（商人司）として、「足羽三ヶ庄」や三国湊など領内にある座の支配を命じた。但し、これら座の存在は城主堀秀治の時代に終焉を迎えたとされ、橘屋は薬の調合・販売を専業とするようになるが、秀康入国以降も「橘七屋敷」の名称で、親類子方を含め地子・諸役免除の特権を維持した。石場に居住して薬種商を営む慶松（図2の㉓）も「軽物座」の有力商人で、勝家とも懇意な関係にあり、勝家が秀吉と決戦するために北庄から賤ヶ岳へ向かう際に、慶松家の前に馬を止めて主人を呼び出し、「只今猿を捕へに行なり、暫く逢ましきそ」と言い残したという逸話が残されている（『冬夜雑話』）。勝家滅亡後は城主丹羽長秀の御用を勤めている。

石場の金屋（図2の㉔）は北庄氏を名乗り、最初は諸商売と金融業、さらに金屋と屋号して鉄鋼の商売を始め、秀康が入国すると3男直政の養育を命じられ、城の修築普請の手伝も行ったとされる。秀康・忠直の時代には刀鍛冶の下坂家をはじめ多くの職人が刀剣や甲冑などを生産し、城郭や町の建設も盛んであったことから鉄問屋として繁栄した<sup>(7)</sup>。また、慶長期の北庄の町割図（「御城下四ツ割図」）では、九十九橋北詰の京町に両替商と薬種商を営む駒屋（図2の㉕）が本店を構えており、「北庄こま屋」は「大分限者」（大長者・大富豪）と称される北庄城下の草創町人であったと考えられる<sup>(8)</sup>。寛文元年（1661）に福井藩は藩札（銀札）を発行したが、信用元である札元に最初になったのは、木田町に居を構える橘屋ではなく、当時、城下商人のなかで最も財力があり、藩の御用（用金調達）を勤める金屋（石場町）と慶松（神宮寺町）であり、藩札の表には両家の名が刷られていたのである。その後、享保期以降の藩札の発行では駒屋と荒木が札元となった<sup>(9)</sup>のであるが、これらは城下で繁栄する町と有力商人の移り変わりを示している。

註 (1)『福井市史』通史編1 古代・中世 福井市 1997 (2)『福井市史』通史編2 近世 福井市 2008 (3) 河村健史「北庄城（福井城）『北陸の名城を歩く 福井編』吉川弘文館 2022 (4) 越葵文庫 当館保管 (5) (6) 印牧信明「越前国拝領以降の結城秀康」（『総説 福井藩祖・結城秀康とその時代』）『越前百万石ものがたり～福井藩祖・結城秀康～』福井市立郷土歴史博物館 2024 (7) (8)『福井藩と豪商』福井市立郷土歴史博物館 2006 (9)『福井藩札と江戸時代の貨幣』福井市立郷土歴史博物館 2011

## 次回の展示

松平家史料展示室 企画展「日清・日露の戦争と福井」

12月13日（金）～2月24日（月・休）

展示解説シート No.173

令和6年10月19日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 印牧信明

印刷 株式会社印刷